



▲屋号入り家紋暖簾のれん

藍染めに魅せられて

藍染めに魅せられ、その魅力を知ってもらおうと、活動が続けられている方を紹介します。

小谷 やすお 保夫 さん（65歳）竹野町森本在住



▲これまで東京でさまざまな職業を経験してきた小谷さん。6年前、関東から竹野に移り住み、藍染めを始める。以来納得のいく作品作りに打ち込み、現在は市内各地のイベントなどで、仕上げた藍染め作品の展示会を開いている

納得のいく ものづくりを求めて

藍はさまざまな種類の植物繊維から抽出されますが、日本の藍は日本固有の植物「蓼たて」から採取されます。葉や染料として世界中で親しまれ、東南アジア、中国、朝鮮を経て日本に伝えられました。竹野町で藍染めをしているはまだ工房の小谷保夫さんは、「藍で染め上げたものは、使い込むほどに色鮮やかになり、独特の風合いが楽しめます。日本人が好む、風化の美意識に合っています」とその魅力を話します。小谷さんは、「自分が納得できるものづくりがしたい」

染料の管理は子どもの面倒を見るようなもの

自然の植物から作られた藍で染める天然発酵の本藍染めは、使い込むほどによい色合いになり、着こなすほどに肌触りがよくなります。生き物である藍の管理はとても大変で、例えるなら子どもの面倒

という思いで、仕事の傍ら東京のカルチャーセンターで化学染料の染色を学び、自分のアイデアで活躍の場を広げられる藍染めの世界に魅力を感じ、その道を進み始めました。現在は関東の知人と年一回、東京展に参加しながら、旅館、飲食店などの商い暖簾のれんの注文制作をしています。

もっと多くの人に藍染めを体験してほしい

一方、小谷さんは、作品を作るだけにとどまらず、魅力

を見るようなものです。毎日藍を竹の棒でかくはんしながら機嫌を損ねないよう細心の注意を払わなければなりません。アルカリ度や液温、発酵具合などを観察し、酒や水あめなどを加えて調子を整え染めに入ります。小谷さんは、「藍をたてるには、きれいな水を使わないと微妙に発色に影響します。染め残しの藍染め液は、農作物の肥料にする染師もいるほど自然にやさしい染色法だと知り、ますます藍染めに惹かれました」と目を輝かせながら話します。

たつぷりの藍染めを一人でも多くの人に知ってもらえるように、無料体験をしてみようと考えています。

「私は若いころに絵を描くことに興味を持っていました。もしかすると絵心があつたのかもしれませんが。自分のアイデアで広げられる藍染めの世界に夢中です。今後は、ホテルの宿泊客や旅行者などが気軽に体験できるように、作品の販売も兼ねたギャラリーを開き、さらにそこで、材料費のみで体験してもらえようという計画をしています。一人でも多くの人に親しみを持ってもらえるように、藍染めの間口を広げたいです」と頭の中のキャンバスに思い描く未来図を、熱っぽく語っていました。



▲「総絞り染めの浴衣地」。柔らかな手触りと深みのある藍が特徴